慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　武田　純三
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

第20回慶應医学賞受賞者決定

生命の謎に迫る研究成果を挙げた 2名の偉大な研究者が受賞

慶應医学賞は、世界の医学・生命科学の領域において医学を中心とした諸科学の発展に寄与する顕著、かつ創造的な研究業績をあげた研究者を顕彰するもので、1996年より35名の研究者に対し授与しています。

第20回目を迎えた今年の慶應医学賞受賞者は大隅良典教授（東京工業大学フロンティア研究機構）、Jeffrey I. Gordon教授（米国ワシントン大学（セントルイス）、ゲノムサイエンス&システム生物学センター）の2名に決定し、慶應医学賞審査委員会は左記のとおり授賞理由を発表致しました。

第20回慶應医学賞審査委員【岡野栄之（委員長、医学部教授）、審良静男（大阪大学WPI免疫学フロンティア研究センター拠点長）、浅島誠（独立行政法人日本学術振興会理事）、佐谷秀行（医学部教授）、塩見春彦（医学部教授）、田中啓二（公益財団法人東京都医学総合研究所所長）冨田勝（環境情報学部教授）、永井良三（自治医科大学学長）野田哲生（公益財団法人がん研究会代表理事・常務理事・がん研究所所長）、垣生園子（順天堂大学医学部客員教授）、別役智子（医学部教授）、御子柴克彦（国立研究開発法人理化学研究所脳科学総合研究センター発生神経生物研究チームシニアチームリーダー）、吉村昭彦（医学部教授）】

本賞は、世界十数カ国の著名な研究者および研究機関から推薦された候補者の中から、学内外約90名の審査員による厳正な審査を経て、受賞者を決定しています。受賞者には賞状とメダルおよび賞金が贈呈されます。本年は11月25日（水）に北里記念医学図書館2階北里講堂にて授賞式および受賞記念講演会が開催されます。

大隅（おおすみ） 良典（よしのり） 栄誉教授
東京工業大学フロンティア研究機構

授賞研究テーマ：オートファジーの分子機構の解明

生命を維持するためには細胞内のタンパク質を適切に分解・処理するシステムが必須です。大隅良典教授は、細胞が自分自身のタンパク質等の細胞成分を分解し再利用する「オートファジー現象」を出芽酵母の遺伝学的手法を用いて解析し、世界に先駆けてオートファジーに不可欠な遺伝子群を同定し、それらの機能と生物学的意義について明らかにされました。APG1と名付けて報告されたこれらの遺伝子群は現在ATGと呼ばれていますが、この発見によってオートファジーの具体的な分子機構が明確になりました。そして、大隅教授の発見を発端として、これらの出芽酵母のATGに相当する遺伝子が哺乳動物細胞にも存在し、オートファジーは高等動物においても発生・恒常性維持に必須の役割を果たしていることが解明されました。更に、オートファジー機構の異常は、神経変性疾患や悪性腫瘍の病態や進展においても重要な機能を果たしていることが見出されました。このように大隅教授の先駆的な研究から、オートファジーを基軸とする生命科学研究という新しい分野が創出され、教授自身も継続的に分野を牽引する研究成果を上げておられます。以上のような大隅教授の独創的な研究内容と、他の追随を許さない業績は、慶應医学賞に相応しいものです。

Jeffrey（ジェフリー） I. Gordon（ゴードン）教授
米国ワシントン大学（セントルイス）、ゲノムサイエンス&システム生物学センター

授賞研究テーマ：ヒト腸内細菌の病態生理的意義

ヒトの消化管には腸内細菌叢と呼ばれる数十兆の微生物が存在し、それらの数十万の遺伝子（マイクロバイオーム）が、ヒトのゲノムにコードされていない機能を発揮することが明らかになりつつあります。Gordon教授はゲノムシークエンスによる腸内細菌の分類法を開発し、さらにマウスやヒトの腸内細菌を無菌マウスに移植するというノトバイオート技術を組み合せることで、腸内細菌の健康に対する我々の見方を一変させました。Gordon教授は一卵性双生児などの調査、研究から環境の違いがどのように腸内細菌叢を特徴づけ宿主と相互作用するのかを解明されました。とりわけ2つの全世界的に重要な健康上の問題である肥満および幼年期の栄養不良に、腸内細菌叢が密接に関与すること、さらに腸内細菌が食物の栄養価を規定することも明らかにされました。

Gordon教授は、彼自身のグループや世界的なマイクロバイオームプロジェクトを牽引するのみならず、メンターとして当該分野における主導的な研究者を数多く育てておられます。Gordon教授のマイクロバイオームを基盤とした疾患治療の開発や予防医学への貢献は慶應医学賞に相応しいものです。

特別座談会

新しい医学部新しい三四会、新しい流れへ

【前編】

医学部長　岡野　栄之（生62回）
三四会長　武田　純三（麻52回）
三四会副会長　リー　啓子（内60回）

慶應医学部100周年まで1年余りと迫った今、新病院棟の建設も着々と進行し、医学部、病院そして三四会も大きく変化を遂げようとしている。国内のみならず世界の情勢や医療のあり方が著しく変動する中、医学部、病院、三四会として、どのような医療サービスを提供することができるのか。医学部100周年に向けたそれぞれの取り組みとその後の展望について、第12代目三四会長に就任して約1年が経過した武田純三会長、今年4月に医学部長に就任した岡野栄之医学部長、リー啓子三四会副会長に話し合ってもらった。

【後編は3面に掲載】

▽三四会長については就任から1年以上が経過してしまいましたが、新たに医学部長になられた岡野医学部長とともに、新体制や新たな取り組みについてお話いただきたいと思います。岡野医学部長は、所信表明のときにサイエンスの重要性を強調していたのが印象に残っています。

岡野　偉大なる前任者である末松誠先生が任期の途中で、いわば突然お辞めになるということで、後任の医学部長を務めさせていただくことになりました。すでに本年度の事業目標や予算が決められている中でイニシアチブを取ることには難しい面もありますが、教職員の皆様のご協力により、いくつかの取り組みをスタートさせています。

そういった取り組みの土台となるのがサイエンスです。慶應医学部にとっての学問とは、教育、研究、臨床ですから、その3つがウィン－ウィンの関係になることがとても重要なことだと考えています。そのためには、いかに優秀な人材を集めてくるかといったことも大変重要になりますので、ホームページのリニューアルなどを通して、奨学金制度のことなども周知されるようにロバストに広報活動を展開していきます。

▽武田三四会長にも、新棟のための募金をはじめとした重責があるかと思いますが、今の三四会はどのように運営されているのでしょうか。

武田　比企先生から三四会長を受け継いで1年が経ちましたが、比企先生が大変順調に三四会を運営しておられたので、基本的にはその継承だと考えています。しかし、1年前に三四会長になってみて、会長と副会長とにさまざまな業務が集中していたので、担当ごとに業務を振り分けられるように組織替えを行いました。

▽三四会副会長のリー先生は、女性のお立場でもご活躍です。

リー　武田会長がおっしゃったように、現在の三四会では個々の理事が役割を持ってそれぞれに取り組んでいます。中でも、特に力を入れているのが会員のための対応です。これまでは遠くの支部に対してコンタクトが難しいと感じていましたが、現三四会ではその点を改善し活性化しようとしています。皆様に三四会のことをご理解いただくことは最終的には募金活動にも繋がると思いますので力を入れているところです。募金については、どのような形にすれば皆様が積極的に募金を考えてくださるか、武田会長、末岡先生が中心となってさまざまなところに実際に足を運んでおられるので、我々三四会役員も重く受け止めなければいけないと思っています。

足利日赤、慶應新棟建設へ寄付

足利赤十字病院　院長　小松本　悟（54回）

私は、現在、慶應ボード会議の一員として、慶應病院の経営に参画している。新棟建設のため、戸山理事、医学部長をはじめ、病院幹部が、新棟建設のための募金活動として、粉骨砕身の努力をされていることを毎回ボード会議で聞いている。その労に応えて、足利日赤が慶應の関連病院としてここに壱千萬円寄付をさせていただいた。

足利赤十字病院（555床）は、平成23年7月に全面移転を行い、全室個室、分棟型構造、次世代型グリーンホスピタル、災害に強い病院として、今までに経済産業大臣賞、第1回カーボンニュートラル大賞、医療福祉建築賞、JCI認証取得など、ハード、ソフト面の評価により、多部門に渡り、表彰を受けてきた。

足利赤十字病院は、独立採算であり、92赤十字グループの中でも、経営内容は、常にトップレベルである。病棟稼働率も常に100%を超え、厳しい診療報酬体系にもかかわらず黒字経営を維持している。

足利日赤は、昭和24年、初代小野康平院長（8回生）開設以来、多くの医師を慶應より派遣してもらっている。そして、地域中核病院として、地域からの信頼を受けることが出来るようになった。また、医療圏においては、足利日赤は、慶應大学の関連病院であるということが、更に地域住民へ安心を与え、信頼を得ることが出来ているのではないかと考える。

以上の趣旨により、慶應新棟建設に寄付をした次第である。

新病院I期棟オープン記念のテープカットセレモニーと内覧会

新病院棟1号館I期棟は1階から6階の各フロアが順次オープンし各部門の供用が開始されています。このI期棟オープンを記念し、9月10日にテープカットセレモニーが挙行されました。雨天の早朝にもかかわらず、医学部・病院関係者、義塾関係者、三四会・三田会関係者、建設に携わった竹中工務店・日揮関係者など約100名が1号館I期棟に参集しました。戸山常任理事、竹内病院長、岡野医学部長からご挨拶があり、I期棟の建設からオープンに関わった塾内・塾外の皆さんへの感謝の言葉とこの先の2期棟建設に向けた決意が述べられました。この後に和やかな雰囲気の中、テープカットが執り行われました。

また、これに先立つ9月3日には義塾執行部の先生方にお集まりいただき、I期棟内覧会が催されました。

この内覧会には清家塾長をはじめ担当の戸山常任理事、渡部常任理事、清水常任理事に加えて比企連合三田会会長、武田三四会会長が参加されました。竹内病院長、渡辺新病院棟開設準備室長らの案内で地下1階から6階までの各フロアが視察されました。

来賓の先生方からは「最新の医療設備設置に加えて、患者さん本位の新病院建設が進行していることを見て取れました。この先のプロジェクト進捗に期待しています」などのコメントがありました。

右から、岡野医学部長、清水常任理事、戸山常任理事、渡部常任理事、竹内病院長

竣工した新病棟を視察する清家塾長

不要な三四会会員名簿の処分にお困りではありませんか？

三四会理事会では、昨今の個人情報流出に関する社会問題などで会員がお手元にある不要な会員名簿の処分にお困りではないかと思案してまいりました。そこで、この度、試験的に会員名簿を回収することに致しました。三四会が発行した会員名簿であれば、複数年度の旧版をお送りいただいても結構です。下記受付期間中は、送料は会員負担とし、名簿の溶解費用は本会が負担いたします。

送付先：〒417-0043　静岡県富士市荒田島町11-24
松崎商事株式会社　富士SR事業所
電話番号　0545-55-1700

受付期間：平成27年10月1日～11月30日（必着）
お問い合わせ先：慶應義塾大学医学部三四会　電話番号　03-5363-3735

※送付先、住所はお間違えのないようお願いします。
※受付期間後着、及び着払いの場合は返却となります。

慶應義塾大学病院 各種お問い合わせ先

・初診予約（午前9時～午後7時、第2・4・5土曜日は午後5時まで）

三四会ホットライン
TEL 03-3353-3034（ミオサンシ）

医療機関用
TEL 03-3353-1257　FAX 03-5843-6167
WEB「病院ホームページ」→「お問い合わせ一覧」→「医療機関の方へ」→WEB申し込み：初診外来予約フォーム（24時間申込）
→医療機関からの初診予約申込フォーム
・検査予約（午前8時30分～午後5時）
PET/CT…TEL 03-5843-6165
SPECT …TEL 03-5843-7071
・予防医療センター：人間ドック（午前8時30分～午後5時）
TEL 03-6910-3533

募金の声

負けてはいられない！

医療法人社団玉栄会 東京天使病院　理事長　玉谷　青史（50回）

先日50回生の同窓会で我が親友、高橋克彦君が近況を報告した。彼とは卒業後、米国留学を目標に米国空軍立川病院でインターンとして共に働いた間柄で、今でも年に数回ゴルフのお付き合いをしている。彼は広島市で体外受精のクリニックを開業し、技術面、経営面でも成功し、沢山のベビーと多数の弟子を育てている。この度仕事を整理して100周年記念新棟建設に2000万円を寄付したという事だった。

太っ腹、偉いと同窓会は湧いた。彼には負けられない。後日私も寄付を申し入れたが彼と同じ金額には届かない。募金担当の方から匿名にするか三田評論に公示をするか問い合わせがあった。今までなら匿名を選んだかも知れない。

しかし最近の三四会とか同窓会の会合では前三四会会長比企先生をはじめ募金委員の方々が多忙な本業の上100周年記念寄付事業にも多大なエネルギーを割かれている。全く頭が下がる思いであった。そこで私は公示をお願いした。高橋君からメールが来た。ヤッタネと。彼は三田評論で私の寄付を知ったらしい。

仕事も一段落した我々の年代。卒業後も色々な場面で慶應義塾の先輩にお世話になり、今まで来られたのだろう。医学部新聞では後輩の国際的な活躍が報じられ、元気を与えてくれる。同窓として頼もしい限りである。慶応医学の実践の場である新棟建設に協力できることは素晴らしいと思う。再度、あいつには負けられない。是非三田評論の寄付金名簿を賑わせましょう。

新病院棟への期待

浜松赤十字病院　院長　奥田　康一（外59回）

今年6月20日にホテルオークラで開催された刀林会（慶應外科同窓会）の懇親会場で、以前から大変お世話になっている久保内光一先輩（55回）に久しぶりにお会いしました。その席で先輩から新病院棟建設募金について医学部新聞の『募金の声』に投稿するように言われ、あまり深く考えもせずその場で承知しました。そのためにこのようなことになりました。今から思えば即答した理由にはいろいろあります。同期の末岡　浩君が三四会新病院棟建設募金委員会の委員長であり、大変苦労しているらしいとのうわさを耳にしていたこと。やはり同期の竹内勤君が病院長として獅子奮迅の活躍をしていること。さらにはこの医学部新聞の編集長を超多忙にもかかわらず長年務めているのが、やはり同期の坪田一男君であることなどが思い浮かびました。私は大学からの塾生です。卒後外科学教室での6年間の研修を終え、7年目で浜松赤十字病院に赴任し、今年ですでに30年目になりました。その間、地域医療を取り巻く環境は著しく変化し、新臨床研修医制度をはじめとする医師の需給バランスの劇的変化なども加わり、地方の中規模病院として悲哀を味わっているところです。それでも、母校や母校出身者が活躍されている関連大学からも応援していただき、何とか診療が続けられているのが実情です。浜松においては三田会の皆さんとも大変親しくしていただき、慶應の絆を身にしみて感じております。今まで母校の建設に対して寄付する機会がなかったこともあり、今回は清水の舞台から飛び降りるぐらいのつもりで寄付させていただきました。公私共に義塾には大変お世話になっており、日ごろの感謝の意をこめたつもりです。

最近では信濃町の大学構内にも徐々に新しい建物が増えてきましたが、私が浜松に赴任した後に完成した現在の2号館ですら老朽化は進んでいるように感じておりました。病院を受診した方から「診療内容は超一流、しかし、アメニティーは最低」といわれないように一刻も早く新病院棟が完成することを心待ちにしております。東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年には、国立競技場に隣接するわが慶應義塾大学病院が超一流の病院として、世界各国のアスリートや関係者の方々から信頼される最高の医療を提供している姿が思い浮かびます。

今後、募金活動も建設事業も予定通り進み、「新病院棟建設を中核とした世界に冠たる総合医学府の構築」が実現することを心から祈っております。

鑑賞知来

いわゆる団塊の世代がすべて75歳以上となる2025年に向け、医療・介護の需要が急速に増大する中で、効率的かつ質の高い医療提供体制を構築する必要性が指摘されている。昨年6月に成立した医療介護総合確保推進法の中では、（医療機関の）病床の機能の分化及び連携を推進するために、医療計画の一部として「地域医療構想」が位置付けられた。また、その実現を目指すために「協議の場」が構想圏域ごとに設置されることとなった。

昨年10月からは病床機能報告制度が始まり、本年3月には地域医療構想策定ガイドラインが示され、今年度から各地域で「協議の場」が設置され、地域医療構想の議論が始まっていることと思う。

具体的には、病床機能報告（現状）と、地域毎の将来の医療需要を見比べながら、各医療機関の自主的な取組や医療機関相互の協議が促進されることにより、機能分化・連携の推進を目指すものであり、これらの取組を支援するため、26年度に地域医療介護総合確保基金が各都道府県に設けられ、地域医療構想の達成に向けた医療機関の施設又は設備の整備事業などに交付されている。

これら基金事業が機能分化のイニシャルコスト的な部分を担うものと考えると、そのランニングコスト的な部分については診療報酬の役割が期待されると思う。「診療報酬で病床機能の転換を誘導すべき」という意見も一部にあるようだが、各病床機能の過不足が地域ごとに異なる状況下では、診療報酬が全国一律であることから弊害が大きいと思われる。むしろ、地域のニーズに合わせ適切に機能分化した医療機関が安定的に運営できるよう、コスト面を支えていくことが診療報酬の重要な役割になると考えられる。中央社会保険医療協議会における本格的な議論はこれからであるが、診療報酬については、各地域の協議の進展を阻害しないよう、次々期改定も見据え丁寧に検討を進めていくことが重要であると考えている。

（厚生労働省保険局医療課長　宮嵜雅則　66回）